ヤマノイモの小丸種芋を利用した栽培技術

【背景・目的・成果】
丹波ヤマノイモの慣行切り芋栽培は、10a当たり200kgの種芋が必要であり、植付けは手作業で重労働です。そこで、種芋の大量増殖と機械定植を可能とする小丸種芋を用いた栽培技術を開発しました。小丸種芋（30g以上）栽培では、収量、秀品率は慣行切り芋栽培と同等以上となります。

種芋細分割片による小丸種芋の大量増殖

種芋をいくつかに輪切りにして、表皮を一片1cm（重さ約5g）角に着けて、くさび状に細断します

細断した芋を4月下旬に植栽間隔10cm×10cmに植え付ければ、1か月後にほぼ100%萌芽します

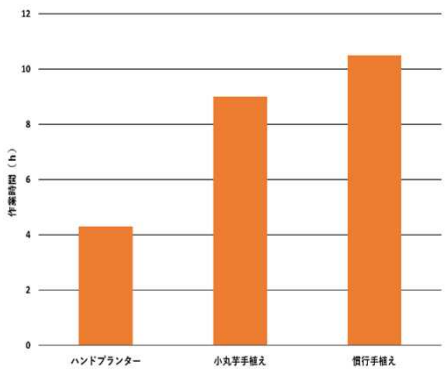
小丸種芋を10a分生産するには、種芋が少量（約25kg）で、栽培ほ場が小面積（1a）で済みます

小丸種芋の機械・器具による定植

小丸種芋は頂芽を着け、半自動野菜移植機やハンドプランターで植付けが可能です

萌芽は頂芽があるため、植付け方向を問わず、慣行切り芋栽培より約半月早まり、生育は順調です

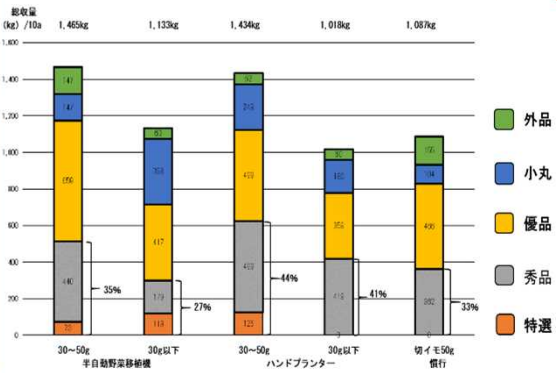
収量、秀品率は（小丸種芋30g以上）、慣行切り芋栽培と同等かそれ以上です



小丸種芋の定植作業時間（時間/10a）

総収量の慣行栽培との比較
小丸種イモ30～50g：約1.4倍
30g以下：約1.0倍

品質比率（秀品以上）
移植機栽培
30～50g：35%
30g以下：27%
ハンドプランター栽培
30～50g：44%
30g以下：41%
慣行栽培　：33%



小丸種芋の形態と定植方法別収量

【技術の活用】
コルゲート管や育苗トレイを使用して小丸種芋を生産すれば、秋の堀取り作業を軽労化できます。

兵庫県 Hyogo Prefecture
兵庫県立農林水産技術総合センター
北部農業技術センター

研究成果紹介動画サイト